高校生への手紙

ある学級通信

第一集

門脇一生著

地歴社

高校生への手紙

門脇一生著

ある学級通信

著者略歴

1924　東京都港区芝に生まれる
1951　東京大学文学部卒業
1951　中野区立第四中学校に勤務
1960　東京都立石神井高校に勤務
1984　同校退職
全国民主主義教育研究会会員

編集執筆
『学習資料　倫理』(共同執筆)全民研編・ほるぷ教育研究所刊
文部省検定教科書『倫理』(高校用・共同執筆)実教出版
『高校社会科の実践』(論文所収)地歴社

高校生への手紙——ある学級通信・第一集　　**定価980円**

1979年2月28日初版第1刷発行
1985年2月20日初版第7刷発行

著者　門脇一生

発行所　地歴社

東京都文京区本郷三丁目21—11
電話　03(815)4439

はじめに

東京都西郊、都立石神井高等学校に勤務して十余年たった一九七二年の春、二年生の担任をすることになった第一歩に、「教師という職業」なる一文をプリントしてクラスに配った。以来、折にふれて、書いては配ってきた随想風の文章をそのまま時間的順序にしたがってまとめてできあがったものが本書である。本としてまとめるにあたって、われながらみるのもいやなもの、出版物として公にするにふさわしくない内容のものなど、若干数をはぶき、また、文章表現上、ひどく気になるところには、多少筆を加えた。

あらためて文章全体をみわたしてみると、この六年余の歳月のあいだの、私自身の精神の推移や、また、一貫してかわらないもの、さらに、たとえわずかでも進みえたかに思われるものなどが織りなしていることを感じる。

書きはじめて一年ほどたったころ、プリントをファイルにまとめて書棚におさめるさい、「はしがき」としてつぎのようなことを書きそえた。

「文章はひとの脈はくのごときものである。なんの気なしに書いた雑文といえどもその例外では

ない。かえって雑文のなかにこそ、そのひとの生地がかくれようもなく現われているといえるだろう。

……ニイチェは、人間を、波の上を限りなく飛んでゆく鳥にたとえた。着くべき岸をもたない鳥、それが人間である、とニイチェはいう。私自身のなかに、そういう思いがつねにある。」

これは、そのころの私のいつわりない表白として、私にとっては記念すべき一節である。読者は、この書物におさめたいくつかの文章のうしろに、こうした私の影をみることができるだろう。

その後、私の立脚点は徐々にうごき、いま、ようやく、「人間の尊厳と自由」を展望し、教職の仕事の意味を、日日、重くかみしめるところまでみちびかれてきた。そうした意味で、本書は、個人的な気まぐれ、ものずき、てらい、なげきといった動機をもこめながら、このようなプリントをつうじて、生徒との人間関係を保持しようとつとめてきた一教師の営みのあとである。

私の属する民間教育団体である全国民主主義教育研究会——全民研——は、「平和で民主的な社会の主権者」の育成をめざす民主的政治教育の研究を目的としている。本書は、社会的政治的視野をはなはだしく欠く書物ではあるが、政治的教養の基盤としての民主主義的エトスをつちかう一端ともなりうるなら、幸せ、これにすぎるものはない。また、私が、高校教師として、教科指導、生活指導に関し、はなはだしい逸脱だけはまぬがれて今日にいたることができたのは、全民研活動をつうじてこそであったことを思い、古在由重会長、高野事務局長をはじめ、会員諸氏にふかい感謝の意を表したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

書名についてひとこと。この書物は一般にいう「学級通信」のイメージにはあたらないが、私にはこんな形がいちばんぴったりしており、一風かわった学級通信として、こういうものもありうるかと考え、書名のサブタイトルとして、あえて使うことにした。また、書名そのものをきめるについても種種、考えた。内容に即していえば「高校ホーム・ルームの生徒におくる担任教師の随想的独白」とも名づくべきであろうが、いかにも長すぎ、結局、表記のようにした。

表紙カバーについては、小川幸江さんにご無理をおねがいし、その作品を利用させていただいた。あつく御礼申しあげる。

本書をまとめるにあたっては、地歴社社長大村健五氏および同社編集部古市美和子さんのあたたかいご協力をえた。こんな小さな本の編集について、池袋の喫茶店で三人でおちあい、いつも話しがそれからそれへと発展して編集会議だかなんだか分らなくなってしまったのは、今後ながく、楽しい思い出となろう。記して、謝意を表したい。

なお、カットは、妻ます恵によるものであることを付記する。

一九七九年二月

門脇一生

高校生への手紙

——ある学級通信——

目次

はじめに　1
教師という職業　4
書くということ　7
労働　9
体育祭をひかえて　11
体育祭を終えて　13
なぎさ　15
よし子のこと　20
勉強について　22
教会のこと　28
手に届く花を摘め　30
暑中見舞　32
八月三十一日の記　34
実力と戦術

文化祭を終わって　36
ひとを好きになるということについて　40
修学旅行をひかえて　43
秋田と私　46
修学旅行メモ　48
常　識　55
星　58
進　路　60
政治的関心について　63
明けましておめでとう　65
青年の自己認識――話しあいの糸口に――　67
冬野の道　70
断　想――幸福と不幸――　74
労働・科学・集団・未来　77
小学校から中学校へ　80

夢の記録 89
終業式にあたって 98
始業式の日に 101
ニヒリズムを超えて愛と自由へ 104
——真下信一『人間と思想』の紹介——
お墓まいり 107
父のこと 111
人間とアメーバ 119
同窓会のあと 122
自由について——討論会のあとで—— 127
学年のはじめに 129
ぬすみ 132
九月十五日 135
読書について 137
このあいだの…… 140

一日中、本にとりかこまれて　142
若いころのあやまり　145
進路雑感　151
心に残るいくつかのこと　157
好きと嫌い　163
親孝行について　167
勉強をめぐる断章　171
青春について　177
ことしの正月　180
別編　「手紙」にたいする生徒の感想文　185
私の「学級通信」をめぐる二、三のこと
——あとがきに代えて——　205

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

教師という職業

昭和二十三年の春に、ぼくは大学を出るべき人間であった。昭和二十三年といえば、敗戦の余燼はいたるところにくすぶっていたころである。新宿駅付近一帯も雑草が生いしげり、食堂で米飯の食事をとることも容易ではなかった。ぼくは実社会に出てゆくのが恐ろしくて、ほかにも理由がないわけではなかったが、ともかく、さらに三年間、大学にとどまった。実際をいうと、この三年間は学園生活としては、ほとんどぼくの心に残っていない。友だちもほとんどなく、ひとりで講義を聴き、ひとりで図書館で勉強し、学生運動にも無縁であった。

三年たってみると、まだ世のなかへの恐怖心が残り、実に困った。京都の大学へゆこうか、などと夢のようなことを考えているうちに、自動的に卒業免状を手にしてしまった。そしてぼくは、会社にはいるのがたまらなくいやであったために、比較的抵抗のすくない教師という職業を選びとることとなった。昭和二十六年の春であった。西田幾多郎という有名な哲学者が、自分の一生を回顧して「私の一生は黒板のまわりを一周したといえばそれでつきる。はじめは黒板を前にしてすわり、そのあとは黒板を背にして立った」という意味のことをいった。ぼくはこの言葉を、久しいあいだ忘れ得なかった。西田さんはともかく哲学という学問を追求するために、積極的にその場所をはなれなかったの

だろうが、ぼくの場合は、洞穴から出る勇気をもたなかった臆病な兵士のようなもので、自慢にできる話しではない。

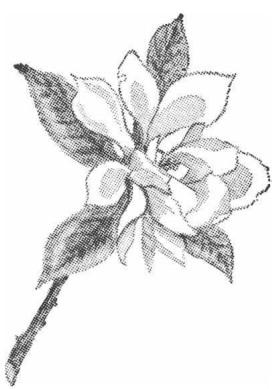
それなら「お前は教師という職業が好きでないのか」といわれれば「まんざら嫌いではない」と答える。もし、生徒のなかに教職を希望するものがあれば、ぼくは祝福するだろう。そして、ぼくの教えた生徒のなかから、そういう生徒がでてくることで、いくばくかの誇りめいたものさえ感じるであろう。ぼくは、若いときから、いわば、知的利己主義者であった。いまもそうであることに反省の念をおぼえざるをえない。しかし、ぼくの心のなかに、あとにつづく人びとを愛し、その人びとに期待し、そういう人びとのために精力をついやすことにしだいに生きがいを感じてきたこともいつわらざる事実である。これも年をとってきた証拠なのだろう。年をとるにつれて教職の重みを感じてきたともいえる。

ぼくの心のなかに、知的利己主義が依然として存在することも事実である。山のような本に押しつぶされそうになってうめいているというのが、ときどき、ぼくの胸にうかぶぼく自身のイメージである。今年、石神井から転任された某先生は、離任式のとき、「日暮れて道遠し」といわれた。ぼくもまったくおなじ感慨にゆすぶられる。

ぼくの頭が、まあまあ人なみに回転するのはながくてあと二十年、いや十五年くらいか。十五年という歳月があっという間にすぎてゆくことは、これまでの経験で知っている。残るところは、この限られた時間の密度をできるだけ高いものにすることである。ぼくの得た、いささかの知的獲得物を、

黒板を背にして、生徒に注ぎこむことである。黒板を一周するにとどまるであろう、ぼくの人生の、それが、せめてもの功徳であろうと、ぼくは思う。

（一九七二年四月二十三日）



書くということ

書くということはどういうことか、それは考えることとどういうつながりがあるか、精密にいえばともかく、大ざっぱにいって、書いているときは一生懸命考えているときだということはできる。その証拠に、書くということはしんどいことであり、ある量を書きあげると、からだの疲れではない、複雑な精神の疲れともいうべきものを覚え、そういう疲れは、からだの疲れとちがって、眠ればとれるというような簡単なものではないのである。手紙一本でも書くのは面倒なものだ。それは、やはり頭脳を働かせることのしんどさからきているのではなかろうか。

それとくらべれば、しゃべるということはなんと簡単であろう。それはざる碁、へぼ将棋のたぐいで、いくらくりかえしても発展というものがほとんどないのだ。しゃべるというのは、考えていない証拠、考えていないからこそしゃべれるのである。「話しあい」ということは現在の流行だが、「しゃべりあい」に堕しているために、いくら時間をかけても実りがないという場合がすくなくない。おなじ「話す」にしても、舌だけでしゃべるな、頭をうごかし、相手のことばに耳を傾け、相手も自分もどういうことから話しはじめ、どういうところへ話しが移りつつあるか、また、話しをさきざきどういうところへ落ち着かせようとしているのか、気を配りあいながら話しあうのでなければならぬ。

「話しあい」の席上で、慎重なひとはメモをとり、またやたらにひとの話しをとったりはしない。話しあいには、ほとんどといっていいほど、自己主張がはいる。自分ばかりはなして相手にいうすきを与えなかったり、大きな声で強調したり、である。自分の意見を固守するところに「考える」という働きははいらない。考えるということは、つねに発展的であり、つねに現在の自分をのりこえようとする働きであるからだ。考えるということが自分の思想や行動を客観的にみつめることであるかぎり、考えるということのなかには、感情的なものがふしぎにはいってこない。しかし、話しあいのなかに感情がはいってこないということは、われわれ凡俗な人間にはなかなか望めない。あることを、自分の嫌いな人間から聞いた場合には反発を覚えるが、おなじことを、好きなひとのくちから聞くと、妙に素直に聞ける、というようなことが、ぼくも残念ながらある。話しあうということは、実にしばしば、純粋な意見の交換ではなく、ことばを通して、他人との感情の交流を経験しているにすぎないのである。話しあいによって解決がつくということももちろんあるが、話せば話すほど相手とのちがいが分ってくるということも、すくなくない。

書くということは、感情をふしぎに排除し、書きつづけてゆくなかで、自分の考えのうつり変りが文章の形ではっきり分り、従ってまた、それをのりこえてゆくことができるものである。書くということは、文字を通しての、自分との「話しあい」「対話」である。夾(きょう)雑物をまじえない、澄んだ大気を、ここで呼吸することができる。ちっぽけな、つのつきあいを脱却することが、ここではできる。

ある一定量の文を書くと、もう書くことがないという地点に達する。吐き出すものはすべて吐き出したのである。古い卒業生がやってきて大学の卒業論文を書いたときの話しをした。かれのいうには「岩波新書一冊分くらい書くと、もう書くことがなくなってしまいました。結局ぼくの頭は、そのぐらいの内容なんですね」と。岩波新書一冊くらいならいいが、うすいパンフレット一冊くらいのひとも、自分ではそういうことに気がつかないで、口角泡をとばして議論をしていることもあるかもしれない。

他方からいえば、書いても書いても、つぎからつぎへと溢れるように書きたいことが生まれてくるということがある。とくに、若いときはそうである。若さは、疲れるということを知らない。そういう時代には、すべてのものを猛獣のように貪欲に飲みこみ、強健な胃で強引に消化してしまうようなことが可能だ。読み、考え、書き、語る——そうしたなかで、うんと成長しなければならない。そして、ぼくは、そのなかで、読むことと書くことをすすめるものである。キュリー夫人は六十七歳の死にいたるまで、文字通り物理学の鬼だった。かの女が夫とともにラジゥムを発見してゆく過程は『キュリー夫人伝』中のもっとも読みごたえのある一章をなす。その夫人が一生を回顧して、「私が一番勉強したのは女学生の時代です」と語るところを読んで、ぼくは、いまさらながら、「若さ」というものが、万人の人生にとって、ことごとく、ある「ピーク」をなすものであるという不変の鉄則みたいなものを感じたのである。

（五月三日）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.